

自己評価表

愛媛県立今治高等学校伯方分校
学校番号 14.2

教育方針	地域に根ざし、個々の生徒に応じた教育を目指し、勤労と責任を重んじ、人間性の涵養に努め、豊かな文化の創造と発展に寄与することのできる心身ともに健全な人間を育てる。	重点努力目標	『にしき(忍耐・真剣・希望)を体現できる生徒の育成』 個別指導の充実と主体性を育む教育活動の実践— 忍耐…風雪の道を歩み、自己をきたえる 真剣…探究の道を歩み、英知をみがく 希望…理想をかかげ、未来をひらく
------	----------------------------------------------------------------------------------	--------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方針
魅力ある学校づくりの推進	魅力ある学校づくりの推進	生徒による授業評価を導入して授業改善を図りながら、学校魅力化を推進することにより、「伯方分校に入学してよかった」と思う生徒100%を目指します。 A:100% B:90%以上 C:80%以上 D:79~60% E:59%以下	C	授業評価による授業改善に取り組もうとする姿勢が定着しつつあり、学校生活に対する生徒の満足度も昨年度比5ポイント上昇した。 生徒:88%(保護者:93%)	生徒による授業評価の実施と併せて授業改善に継続的に取り組む必要性について、共通理解を粘り強く図っていくとともに、生徒の成長を促すための指導体制の見直しと充実化に一層努める。
		学校の教育目標や経営方針、生徒の活動状況等を、ホームページや学校通信等に掲載するなどして情報発信に努めます。	B	学校ホームページの更新や「にしき通信」の発行等による情報(魅力)発信を効果的に行うことができた。	保護者や入学希望者のニーズにも対応できるように的確な情報発信に努める。新たに作成したランディング・ページの効果的な活用法についても検討を加える。
	教職員の資質・能力の向上	校外研修への参加機会を確保しながら、生徒理解研修等により、生徒が充実感や達成感を味わえる学校づくりに努めます。	C	校内では特別支援やICT教育等に関する研修を実施することができた。校外での研修の成果を共有する機会を確保する必要があった。	校内外の研修への積極的な参加を促すとともに、オンラインを含めた研修の成果を、全教職員で共有するための機会を確保する。
自ら学ぶ力と豊かな創造性	施設・設備の充実	施設・設備等の点検や情報の適正な管理に努め、保健指導や防災教育の充実化により、安全・安心な環境づくりに努めます。	C	保健指導や防災教育の適切な実施に加え、定期的な安全点検の実施により、安全・安心な教育環境づくりに努めることができた。	施設・設備の清掃・美化・保全活動を日常的に意識して行うとともに、防災教育の成果を全教職員で共有するための機会を確保する。
	家庭学習・自主学習等の充実	ICTの活用や適切な課題の工夫により、学習意欲の喚起を図り、1日3時間以上学習する生徒65名(80%)以上を目指します。 A:65名以上 B:64~60名 C:59~41名 D:40~33名 E:32名以下	D	学習時間は年々減少する傾向にあるものの、一人一台端末とスタディサプリの導入によるICT活用が進むようになって以降は、家庭学習の状況も改善されつつある。3時間以上の生徒:39名(49%)	スタディサプリを活用して、生徒のレベルに応じた課題を提示し、学習意欲を喚起するとともに、家庭学習習慣の確立に努める。
	朝の読書の深化と読書指導の充実	朝の読書をおとして、読書に親しみ、思索する態度を育てます。(図書室年間貸出冊数一人当たり3冊以上) A:4冊以上 B:3冊 C:2冊 D:1冊 E:0冊	C	図書館だよりの内容が充実し、図書室の利用状況も改善された。朝読書に取り組む姿勢にも良い変化が見られた。 貸し出し冊数一人当たり:2,0冊	図書館情報を積極的に発信するとともに、「ライブラリー・キャラバン」など読書にいきなう行事の工夫に努める。新刊や蔵書にアクセスしやすい仕組みをつくる。
	教科指導力の向上	ICTの活用などにより、主体的・対話的で深い学びを積極的に取り入れ、「よく分かる」「学力を伸ばす」授業改善に取り組んでいます。	C	ICTを活用した授業実践は増加傾向にあるものの、主体的・対話的で深い学びにまで発展させるためには、更なる授業改善が必要である。	生徒の多様化の深化に対応するためにも、教科指導や人権教育等の指導力向上に資する校内研修(研究授業等)を計画的に実施する。
各種検定の奨励	各種検定合格者65名以上、上位資格取得者5名以上を目指します。 A:65(5)名以上 B:64~60(4)名 C:59~41(3)名 D:40~33(2)名 E:32(1)名以下	C	各種検定対策が積極的に進められており、生徒の学習意欲の喚起にもつながっている。 合格者数:76(1)名	家庭学習の充実化を図るとともに、個別指導の徹底に努め、上位資格へのチャレンジをサポートする校内体制づくりを行う。	

※ 評価は5段階(A:十分な成果があった B:かなりの成果があった C:一応の成果があった D:あまり成果がなかった E:成果がなかった)とする。

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方針
豊かな学び力と創造性	一人一人の進路実現の工夫	生徒一人一人に応じた適切な進路指導を行うことにより、進学希望者全員の進路実現を目指します。(国公立大学合格3名以上) A:4名以上 B:3名 C:2名 D:1名 E:0名	C	生徒一人一人に応じた適切な進路指導を行うことにより、ほぼ希望通りの進路実現を達成することができた。上位層を確実に合格させるための指導体制については改善の余地がある。国公立大学合格者:2名	進路指導体制の充実化を図り、進路情報や進路指導に関するノウハウの共有化を進める。 面談等の機会を活用して、一人一人の生徒に、自身の適性を自覚させるとともに、発達段階に応じた課題を明示することなどして、キャリア発達を促す指導にも力を入れながら、正しい職業観と勤労の精神を育成する。
		地元企業や関係機関との連携を密にすることにより、就職情報の提供や求人開拓に努め、就職希望者全員の進路実現を目指します。	B	地元企業との連携を密にし、求人開拓を行った結果、生徒の進路希望に適切に対応することができた。	
	部活動の充実と活性化	部活動参加率100%を目指し、生き生きとした学校生活を送れる環境づくりに努めます。(県レベル以上の大会に出場する生徒57名以上) A:57名以上 B:56~49名 C:48~41名 D:40~33名 E:32名以下	B	部員数の減少により運営が厳しくなった部活動も存在するが、生徒は熱心に活動し、俳句部が全国1位の賞を獲得するなど、目標に向かって努力することができている。 県レベル以上出場生徒数:50名	生徒の主体的で対話的な活動の場としての部活動の意義の啓蒙に努めるとともに、限られた時間内で効果的な練習方法等の工夫・見直しを徹底する。
思いやりと自己を律する心	基本的な生活習慣の確立	基本的な生活習慣の確立に努め、各学期皆勤者57名(70%)以上を目指します。 A:57名以上 B:56~49名 C:48~41名 D:40~33名 E:32名以下	B	多くの生徒は基本的な生活習慣が身に付いており、各学期の皆勤率も概ね良好である。 皆勤者数:1期55名、2期53名、3期53名	学校生活における目標設定など、生徒の自律的な生活を適切にサポートする指導に加え、家庭との連携を図ることにより、基本的な生活習慣の確立に一層努める。 学校生活において、教師自らが率先垂範、師弟同行の姿勢で指導に取り組む。
		挨拶の励行に努め、豊かな人間関係を育む情操を培うとともに、規範意識を育てる教育活動を充実させます。	C	挨拶を含め礼儀やマナー、他者への配慮等について、丁寧に指導しなければならぬ場面が見られた。	
	互いに認め合い、支え合う仲間づくり	生徒の悩みを受け止める環境づくりに努めるとともに、人権尊重の意識を更に高め、人権侵害を「しない・させない・許さない」生徒100%を目指します。 A:100% B:90%以上 C:80%以上 D:79~60% E:59%以下	C	生徒の悩み等に関する情報共有が機能しており、効果的に指導に生かすことができた。無意識に他者を傷つける言動が見られ、日常生活の中で人権感覚を高めていくことができるような指導に課題が残った。	生徒が発するサインを見逃すことなく、面談等により適切な指導を行うことができるよう生徒理解研修等によるスキルアップを図るとともに、自らの大切さや他者の大切さがお互いに認められていることを生徒自身が実感できる雰囲気作りを努める。
郷土愛と地域貢献	特別活動の充実と連帯感の醸成	学校行事や生徒会活動などの特別活動を盛んにし、愛校心や地域に貢献する心を育てます。	C	生徒会チャレンジが継続できなかったことは残念であったが、制限のある中で学校行事の充実化を図ろうとする工夫が見られた。	地域等の教育力を効果的に生かしながら、総合的な探究活動の更なる充実化を図る。
		生徒会や各種委員会を通じてボランティア活動や地域のイベントへの参加を促し、地域が抱える課題について主体的に考える生徒の育成を目指します。	C	コロナ禍でもあり、例年のような活動はできなかったものの、総合的な探究活動では地域と連携した取り組みが多く、地域防災学の研究成果が全国大会で優秀賞を獲得するなど一定の成果を得ることができた。	生徒会活動や各種委員会活動の活性化を図るとともに、魅力的な学校づくりに参画しているという自覚を促すことにより、自ら課題を発見し、他者と協働してその解決に取り組もうとする生徒の育成を目指す。
改善業務	適切な勤務時間と職場環境の整備	校務分掌の整理・統合により、業務分担の適正化と明確化に努めるとともに、教職員の疲労や心理的負担の軽減を図ります。	C	校務分掌の整理・統合により、業務分担の適正化と明確化に努めたものの、協働体制の構築には課題が残った。	働き方改革に関する研修を継続する。管理職面談の機会を増やすなど、心理的負担の軽減に努めることにより、協働体制の構築を図る。

※ 評価は5段階(A:十分な成果があった B:かなりの成果があった C:一応の成果があった D:あまり成果がなかった E:成果がなかった)とする。